厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

平成 15 年度厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業
「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」

分担研究報告書

外国人児童生徒に対する教育の現状とニーズ
――群馬県太田市における取り組みから――

根岸親[1]、小島祥美[1]、中村安秀[1]、李節子[2]　重田政信[3]
1　大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座
2　東京女子医科大学大学院看護学研究科、3　医療法人小泉重田小児科

＜研究要旨＞
本調査は、外国人の定住化が進む中で、日本社会において外国籍小児が出身国の文化やコミュニティを尊重しつつ健康に育成できる環境づくりをめざし、太田市の教育機関における現状の把握と課題を明らかにすること、また具体的な教育行政施策を提案することを目的にしている。本年度は外国人の子ども、外国人家庭、受け入れ校の教員の 3 点から包括的に実態調査を実施し、外国人児童生徒の教育の現状とニーズの把握を行った。在日期間の長期化や日本で生まれた外国人の子どもの増加により、日本語での日常会話は十分に可能であるが、日本語による学習の習得には課題があること、また母語を喪失しつつある状況の一端が明らかになった。子どもたちの将来の進路進学を見据えながら、ことばの障壁を乗り越え、学力を保障していく具体的な学習方法の提示が切実な課題である。今回の調査結果にもとづき、学習場面での日本語習得および学力定着をめざしたバイリンガル教育の実践に太田市、太田市教育委員会、学校現場と協働しながら取り組み始めたところである。今後は、母語教育を取り入れた学習体制の効果を長期的な視点から検証していくことが求められている。

A.研究目的：

現在日本には約 180 万人の外国人が暮らしている。年々外国人登録者数は増加し、かつ定住化傾向にある。また総婚姻件数に占める国際結婚の割合は 4.5%に増加し、親が外国人である小児も増加している。すなわち、夫婦が外国人および国際結婚した外国人にとって、出身国の文化やコミュニティを尊重しつつ、日本社会の中でどのように出産し子育てを行うかということが大きな課題となっている。

「平成 14 年度日本語指導が必要な外国人

児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」（文部科学省）によると、日本の公立学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒は 18,734 人となっている。また、在籍期間別にみると、「6 ヶ月未満」の児童生徒は減少している一方で、「6 ヶ月以上 1 年未満」、「1 年以上 2 年未満」及び「2 年以上」在籍している児童生徒数は増加をしている。日本において外国人の子どもは義務教育への就学は課せられていないにも関わらず、今や日本全域の公立学校に外国人児童生徒は在籍し、在籍期間の長期化、定住化傾向が伺える。

こうした現状の中、筆者らは厚生労働省子ども家庭総合研究事業「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」（牛島廣治班）の一環として、外国人住民の割合が高く、行政として積極的に外国人対策に取り組んでいる群馬県太田市の、保健医療・教育分野にまたがる調査研究を進めている。本調査では、太田市における教育機関における外国人児童生徒に対する教育現状を把握と課題しその課題を明らかにすること、学校現場での実践を通して具体的な教育行政施策を提案することを目的としている。本年度は、昨年度の基礎データの分析を基に、外国人児童生徒の教育の当事者である外国人の子ども、外国人家庭、受け入れ校の 3 つの視点から実態調査を実施し、包括的に現状とニーズの把握を行った。調査後は把握されたニーズを基に、課題解決へ向けた具体的実践の実施･検証を学校現場、教育行政等と共同で実施している。

B.研究方法：

太田市における外国人児童生徒教育の詳細な現状とニーズを把握するために、外国人児童生徒教育実態調査として、子ども、保護者、教員を対象に次の 3 つの方法で調査を実施した。本調査では、太田市において最大多数を占め、子どもたちの教育においても問題が顕在化しているブラジル人児童生徒及び保護者を主な対象とした。調査期間は 2003 年 1 月から 2 月である。

①外国人児童生徒への質問紙調査：外国人児童生徒の学習環境、言語環境を明らかにすることを目的として実施した。ルビをふった日本語版及びポルトガル語版の質問票（資料 1）による質問紙調査法にて行った。質問内容は回答者の属性（年齢、性別、学年、出生地、来日時の年齢、得意な言語、ブラジルでの通学経験の有無）、学校への満足度、日本語の理解度、各教科の好み、友人関係、家庭での使用言語、ブラジル人学校[1]及びポルトガル語の塾への通学経験有無など 17 項目である。質問票は太田市教育委員会を通じて教育長からの依頼状とともに太田市内の公立小中学校に送付した。回答した質問紙は各校から教育委員会へ返送し、回収した。回答に際しては、各校の外国人子女教育担当主任の教員や在籍クラスの担任教員、日本語指導助手の方々の協力の下実施された。対象者は太田市内の公立小中学校に在籍する全ブラジル人児童生徒 165 名で、130 名から回答を得た（回収率 78.8%）。

②外国人保護者へのフォーカス･グループインタビュー：外国人保護者の教育に対する意識とニーズを明らかにすることを目的として実施した。調査方法はフォーカ

[1] ブラジルのカリキュラムに沿って教育を行っている。太田市内及び隣接する大泉町には児童生徒数が５０人以上の比較的規模の大きいものだけでも５校以上ある。

ス・グループ法により実施した。インタビューガイド（資料 2）は事前に作成した。質問内容は子どもの就学理由、家庭での子どもの様子、公教育に関する意識、子どもの教育に関する今後の希望などであった。ポルトガル語を使用言語として実施した。対象は太田市立Ａ小学校に在籍する子どもを持つブラジル人保護者と太田市立Ｂ，Ｃ中学校に在籍する子どもを持つブラジル人保護者で、２つのセッションに分けて実施した。

③教員への半構造化インタビュー：外国人児童生徒に対する教育に関わる教職員の現状と課題を明らかにすることを目的として実施した。事前に作成したインタビューガイド（資料 3）を使用して、半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。質問項目は外国人児童生徒への指導体制と対応状況、指導における課題と改善案、母語がわかる指導助手配置による効果、外国人児童生徒の学校生活、学力、進路進学の状況、外国人保護者の学校への理解と学校行事への参加などである。対象は外国人集住地域にある太田市立Ａ小学校とＢ中学校の管理職者、外国人児童生徒の指導に関わる学級担任、日本語教室担当教員（特配教員）、日本語指導助手[2]、進路担当教員（中学校のみ）各１名ずつとした。

[2]外国人の子どもたちの母語が分かる指導員で外国籍住民を積極的に採用している。勤務時間は平日９時から１２時までの３時間で、勤務内容は日本語教室、普通学級でのTeam Teaching(T.T)、通訳、連絡文書の翻訳などである。2002,3 年度の対応言語とその派遣人数は、ポルトガル語 10 名、スペイン語 2 名、中国語 1 名、ハングル 1 名の計 14 名を市内の小中学校に派遣していた。雇用形態については、太田市の臨時委託員（非常勤講師）として 1 年雇用し、現職者からの紹介や一般公募により採用している。

C.研究結果：

1.外国人児童生徒への質問紙調査

1)太田市の公立小中学校に在籍する外国人児童生徒の背景

子どもたちの出生地は「ブラジル」が 66.1%、「日本」が 31.5%だった。日本で生まれた子どもは中学生では一人もいないが、小学生では 40.8%となっており、さらに在籍学年別による出生地を見ると、小学校高学年（4 学年から 6 学年）では全体の 20.0%、低学年（1 学年から 3 学年）では全体の 58.5%が日本生まれだった。小学生の 80.6%、中学生の 48.2%が 6 歳になる前までに来日していた（表１）。ブラジルでの通学経験がある者は小学生で 17.3%、中学生で 48.3%だった。

2）子どもたちの言語使用状況

話しやすいことばとしては小学生の 43.9%、中学生の 51.7%が「日本語」と回答した。また、話しやすいことばとして「日本語とポルトガル語」を選んだのは、小学生では 28.6%、中学生では 27.6%の子どもたちが日本語を「話しやすいことば」として捉えていた（図 1-1、図 1-2）。家庭における使用言語については、父親と話すことばについて小学生の 46.7%、中学生の 53.8%が「ほとんどポルトガル語」と答えた。母親と話す言葉では小学生の 49.0%、中学生の 50.0%が「ほとんどポルトガル語」と回答した。兄弟の間では小学生 19.5%、中学生の 21.4%が「ほとんどポルトガル語」と回答した。一方、日本語で話すと回答したのは父親との会話においては小学生で 15.2%、中学生で 19.2%、母親との間では小学生で 17.7%、中学生では

17.9%だった。兄弟姉妹の間では日本語で話すと回答したのは小学生で 42.9%、中学生で 39.3%だった(図 2-1、図 2-2)。

3）各教科学習に対する好み

各教科については、小学生が「好き」と回答したのが多かった教科は、体育（76.5%)、音楽（67.3%)、算数（66.3%）の順だった。中学生では体育（72.4%)、英語（55.2%)、音楽（41.4%）の順で多かった。「嫌い」と答えた人数が多かったのは小学生（16.7%)、中学生（31.0%）とも「社会」だった（図 3-1、図 3-2)。

2.外国人保護者へのフォーカス・グループインタビュー調査結果

1)日本の学校への就学理由

保護者の多くは日本の学校への就学理由として日本語を身につけること、そして、日本社会、文化へ適応させたいということを挙げていた。ブラジル人学校に就学させなかった理由については費用の問題についての言及よりも組織的な未熟さについての指摘が多くなされた。一度日本の学校に慣れると、ブラジル人学校に慣れるのはむずかしいという意見も出された。

「私たちはここで苦労しているから、娘達には生活していくために言葉（日本語）をしっかり身につけてほしいと思ったから。」（小学生の保護者）

2）家庭でのコミュニケーション

親子間ではポルトガル語で会話し、兄弟間では日本語もしくはポルトガル語と日本語が混在していた。特に子どもが中学生になると、複雑な話題になった時には親子の意思疎通に困難が生じていた。

「私が話していること、彼が話していることが（お互い）わからないときもある。例えばポルトガル語で教育のことについて息子に説明する。私が知っていることを説明するけど、彼はぽかんとしてる。『私が言っていることが分からない？私たちが言っていることをしてないじゃないか』と、彼が理解していないのを目のあたりにする。」（中学生の保護者）

3）子どもたちの母語

子どもたちが母語であるポルトガル語を忘れてきていることを保護者は心配していた。ポルトガル語での会話はできるが、読み書きができない子どもが多かった。特に小学生の子どもは会話でも、簡単な受け答えしかできなくなっていた。保護者は子どもたちに対して、母語を習得してほしいという要望をもっていた。

「最低限少しはポルトガル語の授業をさせなければならないと心配しているほどです。せめて基礎的なことは覚えてほしい。彼らは話すのは分かる。でも書いてあるものは分からない。」（小学生の保護者）

4）子どもの学力

子どもの学力について心配をしている保護者もいるが、子どもがよく勉強しているので、学力については切実な問題と捉えていない保護者が多かった。子どもが学習している状況について把握できていない親もいた。

「確認はできないんで、彼女（娘）が理解できていると言ってることを信じている。学期末の通知表で本当に彼女が言ってる通りかどうか見てみる」（小学生の保護者）

5）子どもの将来、進路

子どもの将来については日本で進学させたいという強い希望を持っていた。一方で周りに進学した外国人の子どもが少ないことや進路についての情報が把握できないた

め不安を抱えていた。

「私たちはここで工場で働くことも受け入れてやってきた。でも、私たちの子どもたちも工場に行かなければならない、ということにしてはならないと思う。夢をもって、それを実現させる機会をつくらなければならない。」（小学生の保護者）

「もうほとんど高校を選ばなければいけない時期に来てる。でも私たちはどんな高校があるのか分からない。何が必要なのか、どの高校が息子の希望にあう分野なのか。」（中学生の保護者）

3..受け入れ校の教員への半構造化インタビュー結果

1) 外国人児童生徒に対する指導体制と対応状況

①指導体制

受け入れ校では個々の子どもの様子をみながら、柔軟に対応し、指導していた。子どもの理解度や学校への適応の度合いも考慮して日本語教室と在籍クラスで連携を図っていた。

「同じよう接してる場面とこれはちょっとこの子には大変なのかなあというときには個人的に見てあげたりとかはしてるつもりなんですけど。一応他の子と同じように接していて、その中で気づいたときには、日本の子もそうですけど、できてないときにはみるような感じで。その他にちょっと劣るときには日本語教室にお願いして、算数の補充してもらったりとか、時間をちょっといただいてるんですけれども。」（担任教員・小学校）

②日本語教室担当教員と担任教員との連携

必要に応じて随時、連携をとって対応していた。また、適応指導等においてはポルトガル語のほうが話しやすい子どもに対しては指導助手に通訳に入ってもらい指導し、意見を聞いたりと、子どもたちの心理的な面にも配慮していた。

「大事なことが起きた時には他の子と同じように対応してあげたいんで、授業限らず日本語教室につれてってちょっと話をしてもらったりとか。あとは子どもたちにとってどういう風に、こっちで授業進めるのか、日本語教室で進めるのか（話し合ってます）。」（担任教員・小学校）

2）指導上の課題

多様な背景を持つ子どもたちの指導に手探りで指導に当たらなければならない中、支援となる教材や研修、横のつながりが不足していた。子どもたちは在籍学級における授業では理解が難しいこともあり、特に中学になってから編入してきた子どもの場合はかなり状況は厳しかった。

「結局一人対全体じゃないから、一対一でしかもそれぞれ日本語の能力が違うので、誰は、何を使って、どういう風に教えたらいいかとかそういうのは手探りで。」（日本語教室担当教員・中学校）

教科では数学、英語はなんとかついていけるが、国語、理科、社会はほとんどお客様のような感じになっちゃってますね。」（管理職・中学校）

3）母語がわかる指導助手配置による効果

どの教員も母語の分かる指導助手配置による効果を認めていた。母語を介した指導補助、生活指導での通訳、保護者への連絡などどれにおいてもその果たされる役割は重要であることが認識されていた。

「もちろんですね。本人達の気持ちとかも吸い上げられますし、あとはよく学校でお知らせとか、保護者に対して、作っていた

だいてますね。やはりポルトガル語をしゃべれるというのですごく安定すると思うんですよね。保護者とのパイプ役。担任とのパイプ役、よく担任が家庭訪問にも一緒に行っていただいたりもしてます。だから、来ない日はちょっと大変なんですよ。なんかあったときがね。」（日本語教室担当教員・中学校）

4) 外国人児童生徒の学校生活、学習能力及び進路進学の実態

①子どもたちの学力

外国人、特に南米出身の子どもたちの学力の状況は厳しく、学習に対する意欲も低いと指摘していた。だが、その現状が保護者にあまり伝わっていないことも指摘された。

「保護者たちは子どもたちがどのように学習して、どれくらいのレベルにあるかを分かっていない。通知表では『ついていけないところもあるけど、がんばってます』とか『特に問題はない』でも、その『特に問題はない』と書いてあっても実は学力では非常に低い。保護者はそれを知らない。」（日本語指導助手・小学校）

②進路進学状況

現状では高校進学は難しい状況にある。不況の中、就職状況も厳しくなっていた。将来の見通しが不透明なことなどにより、子どもたちの進学に対する目的意識、意欲が低くなっていると指摘された。

「きびしいですね。非常に厳しいと思います。進学を希望している子は少ないと思うんですよ。結局１年生、２年生の段階では本人は進学を希望するんですけど、いざ3年になってからじゃあどうすると言ったときに、お家の方が進学の希望をなさらないことが多いです。」（担任教員・中学校）

5) 外国人児童生徒の保護者と学校現場の関係

①保護者の学校への理解

学校側は保護者による学校に対する反発や不満は感じていないが、もっとお互いの意思疎通を図る必要性を感じている。

「去年保護者会開いた時にいろんな意見が保護者の方から出てきたのを聞いたときにね、やっぱ学校に対しての、言葉が通じないことに対してのお互いのコミュニケーション不足というのを感じましたね。」（管理職・小学校）

D.考察

1) ブラジル人児童生徒の教育における学習環境、言語環境における課題とニーズ

①定住化による長期滞在と日本への適応

太田市の学校現場ではブラジル人児童生徒のうち、日本で生まれた子どもは全体の31.5%となっていた。５歳までに、すなわち小学校就学以前に来日した子どもは全体の 73.2%となっている。公立学校に通うブラジル人児童生徒の中で、生まれてからこれまでの成長過程の長い期間を日本で過ごしている子どもが増えている様子が分かる。回答者であるブラジル人児童生徒たちは「話しやすいことば」として、「日本語」と答えた子が小学生で 44.9%、中学生で51.7%、「日本語とポルトガル語」の両方と答えた子どもも合わせると、小学生で63.3%、中学生で 79.3%の子どもが「日本語」を「話しやすいことば」として捉えていた。受け入れ校の教員も特に小学生から入ってきた子についてはスムーズに適応しているという認識を持っていた。児童生徒らの日本語/母語双方の状況を最も知る存在といえる日本語指導助手も*「小学校から*

在籍している子どもは、親たちが日本語を話せなくとも、子ども達は（学校に）適応していけると思います。言語を早く獲得することができると思います。」[3]と述べている。滞日期間の長期化により日本の学校生活への適応における困難が少なくなり、日本語の会話も獲得しやすくなっていることが感じられた。

②教科学習における課題

一方で、日本語でコミュニケーションがとれ、日本の習慣も理解し、日本の学校に慣れた後も、ブラジル人児童生徒らは教科の学習においては困難を抱えている状況が明らかになった。*「学力は学校に適応できている子もなんとかついて行く程度」*[4]という現状が学校現場でも指摘された。現状、ブラジル人児童生徒たちが教科学習に課題を抱えている背景には、日本語の日常会話は獲得していても、教科学習に必要な日本語の獲得にまで達していないということが考えられる。子ども自身も学習言語が必要とされる教科に対しての苦手意識を感じているようである。日本語を「話しやすいことば」と捉えていても、子どもたちの教科における日本語の理解には十分に結びついていないことがうかがえる。教科の好き嫌いについて、小学生では「国語」と「社会」以外の教科については、全て 60%以上の子どもが「好き」と答えているのに対して、「国語」と「社会」はそれぞれ 37.8%、35.0%となっている。これは国語や社会などは日本語の語彙、文章が多い教科であり、それらに対する子どもたちの苦手意識、学習における困難の一端が現れているように思われる。また、中学生になると、小学生で 60%以上が「好き」と答えていた算数（数学）と理科も中学生になるとそれが 13.8%、20.7%にまで下がる。「国語」と「社会」は 10.3%、17.2%とさらに下がる。学年が進み、特に中学になると、一層認知的、抽象的な言語能力が求められていく日本の指導内容のカリキュラムの進度に対して、ブラジル人児童生徒たちの学習言語能力発達の進度は追いつけていないのではないか。そのため、授業が分からなくなると思われる。前段階の理解が前提となるような教科（例えば数学）では学習の積み重ねが要求され、前の授業が分からなければ、次の授業もわからない。分からないことが続けば、授業への関心意欲が低下するのは十分考えられる。関心意欲が低下すれば、理解も一層進まないという悪循環が予想される。

日本で生まれた子どもが増え、滞日の長期化が進むなか、日本の公立小中学校に通うブラジル人の子どもたちにとって、義務教育後の進路選択が大きな課題になってきている。ブラジルでの教育を全く受けた経験がなく、日本の学校で小学校 1 年生から勉強してきた子どもたちにとってはブラジルでのカリキュラムによる学習、進学に適応するのは大変厳しい。かといって日本においても、教科学習に困難を抱える現状では、*「依然高校入試は学力を前提としており、外国人生徒の進学の状況は厳しい。」*[5]。進路進学へ向けた教科学習の積み上げが今後なされなければ、子どもたちの自己実現、つまり将来の夢、可能性へとつながる進路の道を拓いていくことが日本・ブラジルにおいても厳しくなってしまう。

[3] 日本語指導助手（中学校）のインタビューより

[4] 中学校（管理職）へのインタビューより

[5] 中学校（管理職）インタビューより

定住化傾向が進む中、外国人の子どもたちの進路選択を視野に入れた学力保障への取り組みが今後は一層必要になってくると思われる。

③子どもたちの母語

家庭内における使用言語という観点で、今回の調査において明らかになった子どもたちの言語環境について見てみると、親子の間ではポルトガル語で話すと答えたのは小学生の 46.7%、中学生の 51.9%だった。兄弟間となるとポルトガル語で話すとしたのは小学生の 19.5%、中学生の 21.4%と親子間の半分以下になっている。兄弟間では日本語で話すと回答したのは小学生で 42.9%、中学生で 39.3%となっていた。ブラジル人の子どもたちは親子間と兄弟間で使う言語が変化してきていた。*「私たちと彼らの間ではポルトガル語です。兄弟の間では日本語です。」*と保護者の声からもその変化がうかがえる。一方で、*「私のうちでは日本語では話させない。家ではポルトガル語だけにしている。」*というように意識的に母語を保持しようという家庭もある。中島（1998：54）は日本で学校教育を受ける外国人について「日本では日本語が優勢な言葉であり、どんな少数言語も呑み込んで日本語一色にしてしまう傾向がある。母語が現地語に置換されるという現象が起こるのである」と述べている。だからこそ、「家で親が子どもの母語を意識して育てないと、社会性、情緒安定、知的な面の発達が遅れ、子どものことば全体の発達が阻止されたり、遅れたりする。その上親子のコミュニケーションがうまく行かなくなり、アイデンティティの混乱が起こる」と指摘している。

幼い頃から日本で育つ子どもが増えるという現状の中、太田市のブラジル人児童生徒についても、今後はますます、母語保持に対する取り組みの必要性が増してくることが予見される。

2)外国人保護者の教育に対する意識とニーズ

①子どもの就学理由と学校への関わり

子どもを日本の学校に就学させた理由について、保護者からは*「彼ら（子ども）がここで育つときに私と同じような困難を背負わないようにさせてやりたいと思った」*などのように積極的な理由での学校選択の様子が語られた。地域にブラジル人学校がいくつかある状況の中、「本当はブラジル人学校に通わせたいのだけど、費用が高いから仕方なく日本の学校に」、という様な消去法的な選択ではなかった。もちろん、調査の対象者は現在、日本の公立小中学校に子どもを通わせている保護者であるということは十分考慮しなければならない。ブラジル人学校を選択しなかった理由としては、*「現状ではブラジル人学校の中学校は同様の環境を持っていない。教育の質ではまだまだ日本の学校には及ばない」*という種の指摘が費用の高さについてよりも多くなされた。現在の学校についても満足しているとして、特に不満や注文はなかった。これは早くから学校教育現場において外国人児童生徒を受け入れてきた太田市において、母語の分かる指導助手の配置などこれまでの取り組みの蓄積による成果の現れであると考えられる。

保護者の子どもの教育に対する関わりについては、普段は仕事に時間をとられ学校のことに関われていない、自分の受けてきた教育とは違う、意思疎通が難しいというような点から消極的な関わりとなっている

様子がうかがえた。だが、それは「放任」という形ではなく、*「日本のもの（宿題）については何もいえない。手伝うことができないので、もどかしさも感じる。」*というように、子どもの教育を考え、関わっていこうとする保護者の姿勢はあるが、現実ではことばの壁などにより難しい状況があった。前述のように子どもたちの進路進学へ向けた学力保障の必要性があることを考慮すれば、言葉の障壁などを越えていかに子どもたちの教育において家庭と連携していくが今後の課題であると考えられる。

②子どもの学力

ブラジル人児童生徒の教科学習における現状は、もちろん全員ではないが、全般的に困難を抱えがちであることは教員へのインタビューの結果にて指摘されている。しかし、保護者たちは*「とても心配だが、日本のことはあまり分からないのでよく把握できない。」*[6]と切実なものを感じている保護者は少数で、保護者へのインタビューにおいても子どもの学力についての保護者たちの反応は少なかった。この点について、保護者と学校のつなぎ役を果たしている日本語指導助手は次のように指摘している。

「保護者たちは子どもたちがどのように学習して、どれくらいのレベルにあるかを分かっていない。通知表では『ついていけないところもあるけど、がんばってます』とか『特に問題はない』もその『特に問題はない』と書いてあっても実は学力では非常に低い。保護者はそれを知らない。」[7]学校と保護者の間に立つ指導助手の視点ならではの指摘であり、両者の状況・背景を適切に捉えているように思われる。今後は保護者が子どもたちの現段階の学力の状況を把握すると共に今後の進路に必要となる学習理解についての認識を深められるような情報の提供、コミュニケーションが一層必要となってくると思われる。そこにおいては学校側と保護者側の両方の状況、背景を知る母語の分かる人材（例.太田市における日本語指導助手など）の果たす役割は大きい。

③進路進学

「きびしいですね。非常に厳しいと思います。進学を希望している子は少ないと思うんですよ。結局１年生、２年生の段階では本人は進学を希望するんですけど、いざ３年になってからじゃあどうすると言ったときに、お家の方が進学の希望をなさらないことが多いです。」（担任教員・中学校）

こういった認識に反して、今回の保護者へのフォーカスグループ法によるインタビューにおいて最も保護者らの意見が活発に出されたテーマのひとつが進路進学についてだった。*「私も中学、高校と行かせたい。このまま日本にいるか分からないけど、現在でもう８年にもなるし、勉強を続けさせてやりたい。」*[8]など、子どもたちの進路進学についての希望は強かった。だがこれは教員の認識が間違っていたのではなく、外国人児童生徒および家庭の状況が数年前とは変わってきており、日本での進路進学を考え始めているブラジル人家庭が増えてきていることによると思われる。

だが、一方で*「わたしは日本で高校を卒業できたブラジル人を誰も見たことがない。もしそういう可能性が外国人にもあるのな*

6 小学生の保護者グループへのフォーカスグループインタビューより

7 日本語指導助手（小学校）へのインタビューより

8 小学生の保護者グループへのフォーカスグループインタビューより

ら、それは間違ったことではないと思う。」[9]というようにこれまで身近に進学を果たしている仲間のロールモデルが少なく、不安を感じている様子もうかがえた。また、*「ブラジルだったらちがう。ブラジルだったら、私たちは分かる。どのように進学、修了するかが。卒業後の進路もだいたい分かる。でも、日本ではそれが分からない。私たち親がそのことを理解するのはとてもむずかしい。」*[10]と、日本の複雑な進路選択の仕組みに戸惑っていた。

今後は進路に関する情報やロールモデルを子どもたち及び保護者たちに提示することが必要であろう。そうすることにより、子どもたちや保護者の進学に対する理解や意欲を高めることにもつながるのではないだろうか。また、進路進学を考えるにあたっては、やはり前提として、学力をいかに定着させるかが、彼らの今後の日本での生活における大きな課題であるといえる。

現状では外国人児童生徒らの将来の日本での自己実現にとって、進学は避けて通れないものであろう。一方で佐藤（1996）が述べるように学力という一元化された評価だけではなく、彼らがもつ多様性を評価できるような仕組みも長期的には必要なのではないだそうか。志水（2001：375）は「外国人だからといって特別扱いしない」から「外国人として特別扱いする」という考え方の転換を唱えている。「同じ方がよい」とする日本の社会風土に「違っている方がよい」というセンスを多少なりとも付け加えることで日本の学校世界全体がずいぶんすごしやすくなると主張している。

多様な視点からの評価を通じて、多様な背景を持つ子どもたちの進路進学を支援していくことは、結果として日本社会に多様性というプラスの影響を与えうるものと考える。

3) 外国人児童生徒に対する教育に関わる教職員の現状と課題

①指導体制について

太田市の学校現場、特に外国人の集住地域の学校では、子どもたちの多様な状況に柔軟に対応している様子が受け入れ校のインタビューより明らかになった。適応指導などにおいては、子どもの状況に即して対応していた。また、子どもに対してだけではなく、保護者に対しても、面談をする際などは仕事の都合等に配慮していた。その積み重ねが子どもたちや保護者の学校への満足感につながっていた。太田市では 1990 年始めより外国人児童生徒が学校現場に在籍する状況があった。その状況に対しての取り組みの蓄積が現在の学校側の柔軟な対応につながっているものと思われる。市内のほとんどの小中学校に外国人児童生徒が在籍するという状況の中、学校現場に関わる教員にとって外国人児童生徒の存在は個人差はあれ、他地域よりも身近な存在としてあったのだと推測される。

また、母語の分かる指導助手は子ども・教員・保護者を結ぶ存在として重要な役割を果たしてきたことも大きな積み重ねの一つであろう。*「せめて一日 6 時間勤務できる体制ができるとありがたいなとは思う。」*と、現場のニーズも強い。子どもたちの背景を考慮した指導、保護者への対応が学校に対

9 小学生の保護者グループへのフォーカスグループインタビューより
10 中学生の保護者グループへのフォーカスグループインタビューより

する信頼感を蓄積する結果につながっている。特に保護者とのコミュニケーションでは学校側の配慮と共に、ことばの壁を低くし、両者の背景を理解しながら対応にあたっている指導助手の果たしている役割が大きいように感じられた。指導助手は学校、子ども、家庭の重要なつなぎ役をはたしているといえよう。

②指導上の課題

主に学習面での日本語教室の指導においては*「結局一人対全体じゃないから、一対一でしかもそれぞれ日本語の能力が違うので、誰は、何を使って、どういう風に教えたらいいかとかそういうのは手探りで。」*[11]と、日本語教室担当教員は複雑な課題に対する指導の難しさを語っている。子どもの背景は多様である。さらに既述したように外国人の子どもたちの課題が認知的な面での言語能力の獲得を必要とするようになってきている中、教科学習につながる指導も求められてきている。*「もっと教材が必要だと思う。（中略）もっと研修をしなければならなかったと思う。」*[12]ということばにもあるように、子どもの抱える課題に対しての取り組みが専門性を求められるなか、指導者への支援・研修が必要なのではないか。*「今日では、特殊支援教育における研修・支援は充実したものとなってきました。同様に特別なニーズのある外国人児童生徒に対する日本語教育にいても専門性を高めるための研修があってもいいのではないでしょうか」*[13]現場の教員のことばである。現場の教員の方々は、主任会や外国語研修などの集まる機会を見つけながら連携を図っている。一層のシステムとして横のつながりを支援することは、結果として、子どもへのよりよい指導として還元されていくと考える。

E.調査で把握された課題への取り組み

以上のように実態調査から把握されたニーズに対して、今年度本研究班は太田市、太田市教育委員会と協働しながら次のような取り組みを実施した。

１）母語を活用した放課後補習授業

日本語による授業の中で日本語の理解力が低いために、教科内容の理解が難しい生徒に対して、ポルトガル語による補習授業を行うことにより内容の理解を促進し、教科学習への意欲を向上させる。本年度は市内拠点校（小中学校各１校）において試験的に実施した。

2) 多民族文化社会における子どもの教育に関するシンポジウム・太田の開催

外国人児童生徒教育実態調査の結果と共に太田市を対象に実施した研究者たちの調査内容について、現場の教師、教育委員会、地域住民と共有し合い、議論しあうことを目的として実施した。

3) 外国人の子どもと保護者のための進路ガイダンスの開催

言語、文化等の背景の違いにより日本の学校システム、特に進路・進学についての理解が難しい保護者らに対し、母語を介して情報を提供することにより理解を深める。高校進学に関する情報提供及び進学した外国人生徒 OB･OG の体験談を聞くことにより

---

11 日本語教室担当教員（中学校）へのインタビューより

12 日本語指導助手（中学校）へのインタビューより

13 2003 年 6 月 1 に開催された「多民族文化社会における子どもの教育に関するシンポジウム・太田」でのパネリスト（日本語教室担当教員）による発言より

子どもたち、保護者が目標を持ち、今後への意欲高められるようなきっかけをつくることを目的として開催した。日本語、ポルトガル語、スペイン語、中国語、英語の 5 言語にて実施した。

４）外国人児童生徒のためのサタデーチャレンジスクールの実施

母語による放課後補習授業を発展させ、太田市内の全公立小中学校に在籍する外国人児童生徒を対象に参加者を募り、土曜日に授業を実施した。母語を用いて、小学生では算数、中学生では数学と英語の予習を中心とした授業を実施し、学習意欲、学力の向上を目指した。

E.結論

今回の外国人児童生徒教育実態調査により、外国人の子ども、保護者、学校現場の3つの視点から包括的に太田市の外国人児童生徒の教育の現状とニーズを把握することができた。そこでは、在日期間の長期化や日本で生まれた外国人の子どもの増加により、日本語での日常会話は十分に可能であるが、日本語による学習には課題があること、また母語を喪失しつつある状況の一端が明らかになった。子どもたちの将来の進路進学を見据えながら、ことばの障壁を乗り越え、学力を保障していく具体的な学習方法の提示が切実な課題である。今回の調査結果にもとづき、学習場面での日本語習得および学力定着をめざしたバイリンガル教育の実践に太田市、太田市教育委員会、学校現場と協働しながら、取り組み始めたところである。今後は、母語教育を取り入れた学習体制の効果を長期的な視点から検証していくことが求められている。

G.謝辞

本研究調査に関して太田市教育委員会、太田市及び学校現場の先生方はじめ多くの方々から絶大な支援をいただいたことを深謝します。

H.研究発表

1　論文発表

なし

2　学会発表

根岸親，小島祥美，中村安秀，李節子，重田政信．外国人児童生徒に対する教育の現状とニーズ　ー群馬県太田市における取り組みからー．第 19 回日本国際保健医療学会東日本地方会（東京），2004 年

3　新聞などの記事

Jornal Tudo Bem．Aula Bilingüe em escolas．2003.3.18

日経ビジネス．外国人子弟に良質の教育を．2003 年 3 月 24 日．

朝日小学生新聞．ブラジルからきた子どもたちのためにポルトガル語で補習授業．2003 年 5 月 20 日．

上毛新聞．多民族社会の教育を考える．2003 年 5 月 30 日．

ハートフル･おおた（＊太田市広報誌）．市長のあまくち･からくち．2003 年 6 月 1 日．

読売新聞．イミグランチス③教育：ポルトガル語授業．2003 年 9 月 19 日

上毛新聞．外国籍の親子に進路ガイダンス．2003 年 9 月 22 日．

上毛新聞．個性を生かしサポート．2003 年 9 月 27 日．

上毛新聞．2 ヶ国語で教科書予習．2003 年 11 月 17 日．

読売新聞．外国人児童ら対象土曜教室始

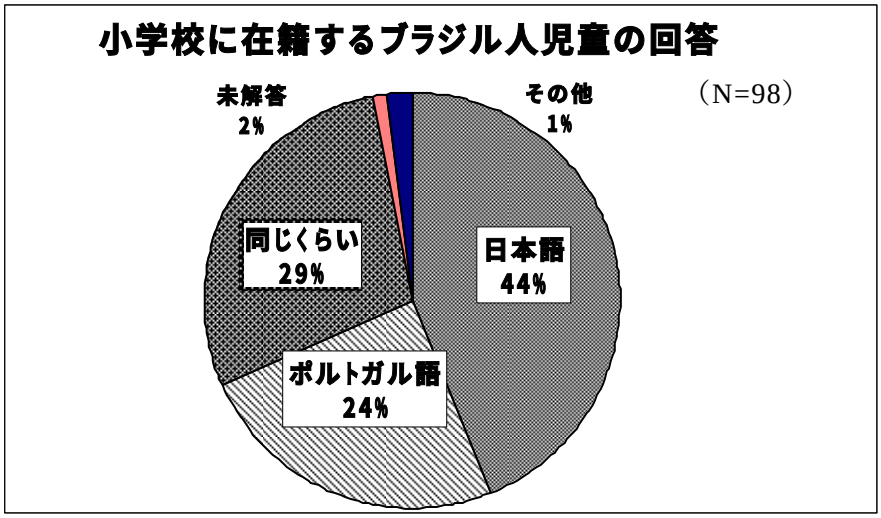
まる．2003 年 11 月 23 日.
　上毛新聞．外国人の子供に 2 ヶ国語で授業．2003 年 11 月 23 日.

表1　調査対象者に関する在籍学校別来日年齢比

(N＝127)

	小学生 (人)	中学生 (人)	計 (人)	
日本生まれ	40	0	40	31.5%
1 歳未満	5	0	5	3.9%
1 歳- 5歳	34	14	48	37.8%
6 歳- 9歳	11	8	19	15.0%
10 歳-12 歳	2	5	7	5.5%
13 歳以上	ー	1	1	0.8%
不明	6	1	7	5.5%
計	98	29	127	100.0%

図 1-1,2　得意な言語に関しての小学校に在籍するブラジル人児童生徒の回答



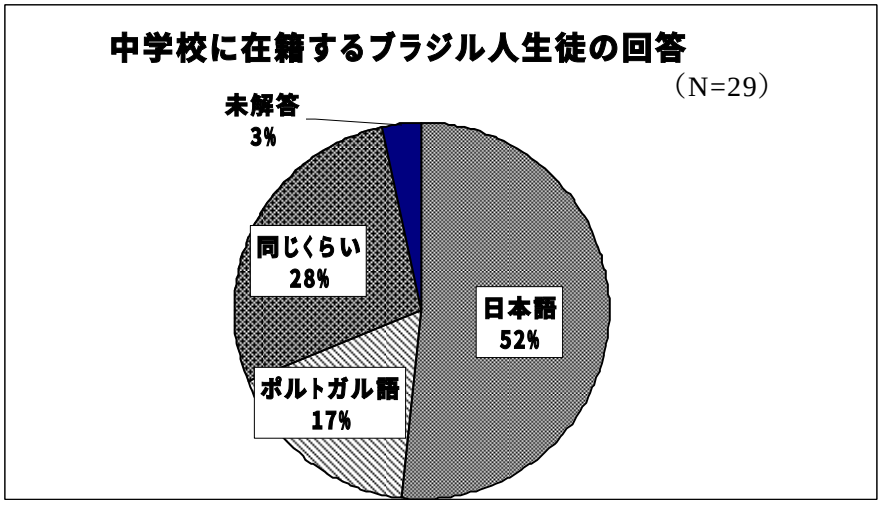


図 2-1　調査対象者の家庭での使用言語についての回答（小学生）

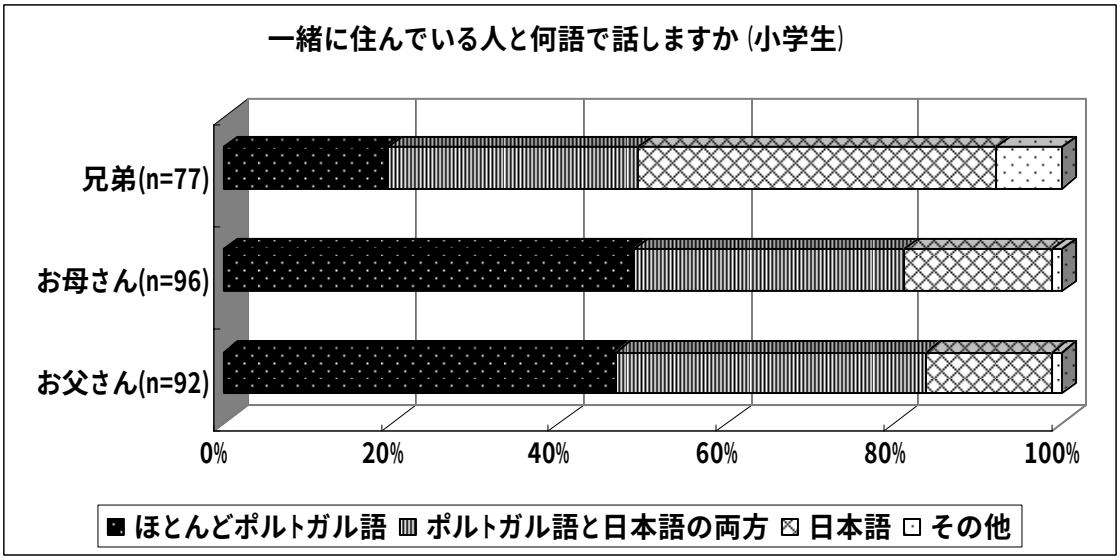


図 2-2　調査対象者の家庭での使用言語についての回答（中学生）

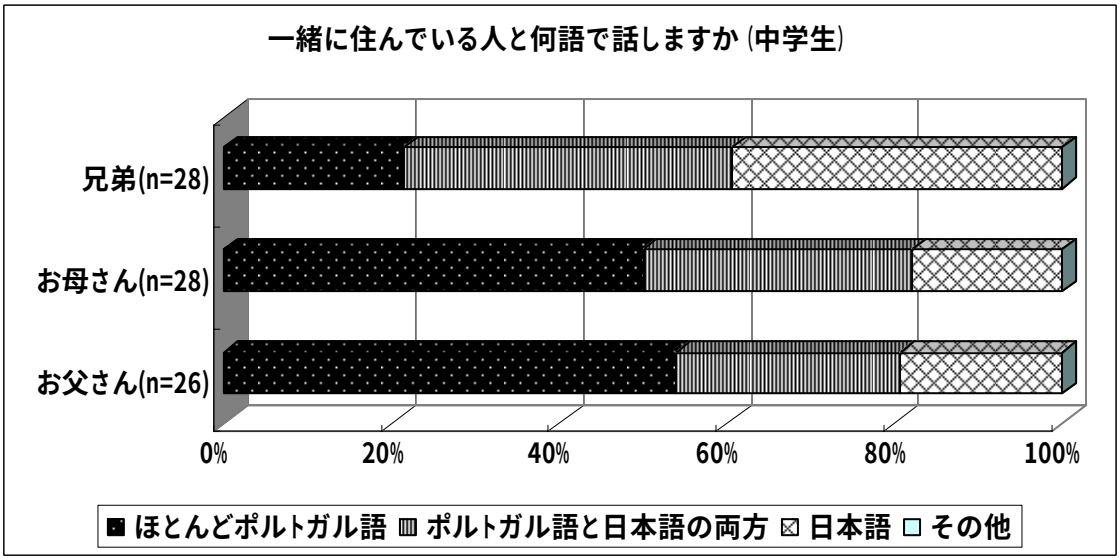


図 3-1　各教科に対する好みについての回答（小学生）

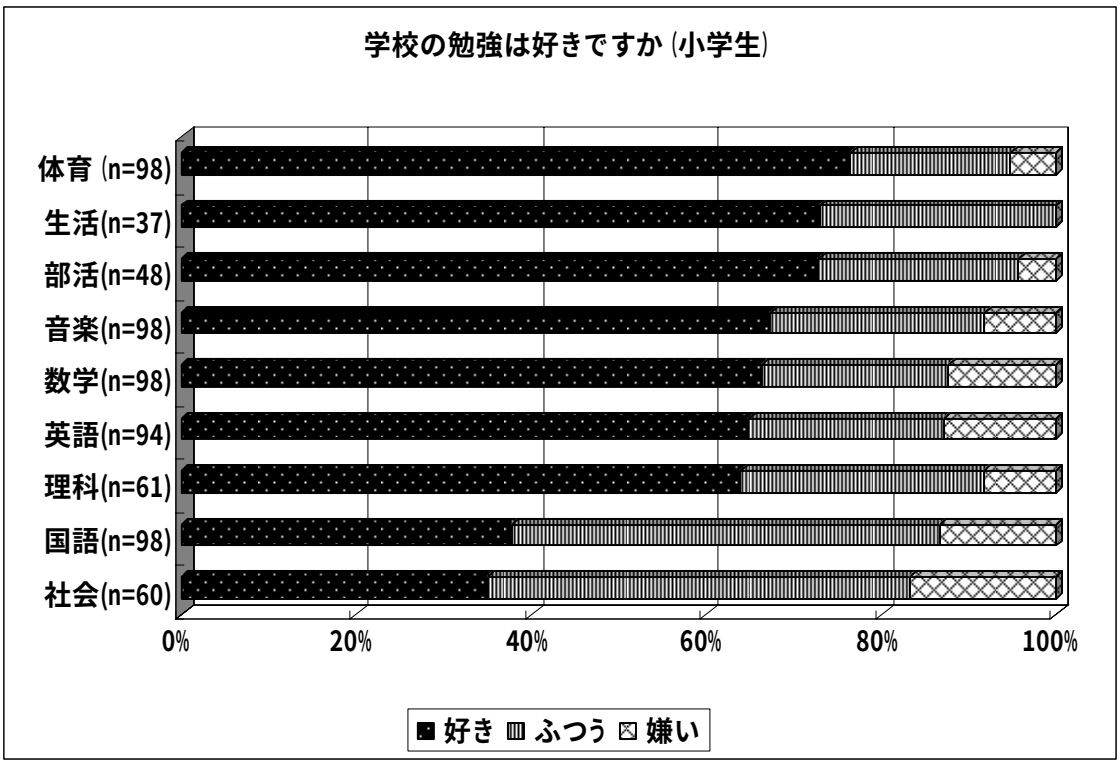
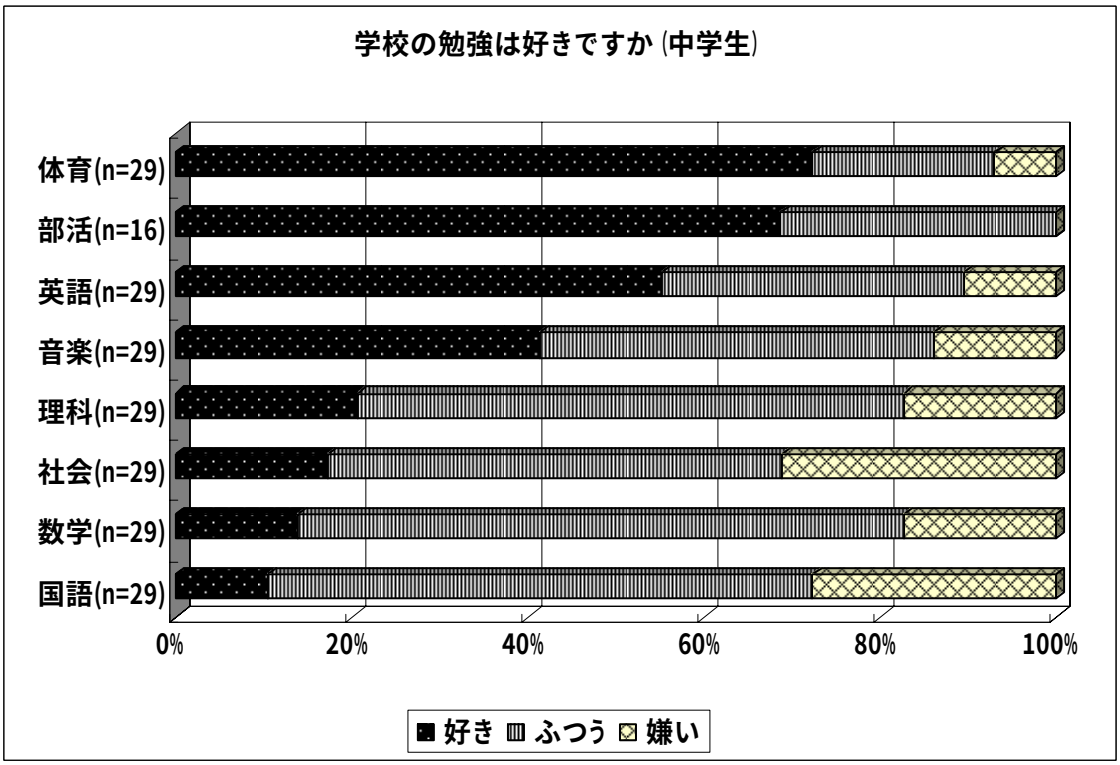


図 3-2　各教科に対する好みについての回答（中学生）



資料 1-1　外国人児童生徒への質問票（日本語版）

アンケートに協力してください

あなたの思う番号に、○をしてください。

■学校のことで質問します

1）日本の学校は好きですか？

１.とても好き　２.少し好き　３.ふつう　４.あまり好きではない　５.嫌い

2）日本語のべんきょうは好きですか？

１．好き　２.ふつう　３．嫌い

3）学校の先生が話す日本語は、わかりますか？

１.わかる　２.ふつう　３.わからない

4）学校のお友だちが話す日本語は、わかりますか？

１.わかる　２.ふつう　３.わからない

5）学校のべんきょうは好きですか？

国語　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

算数　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

生活　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

理科　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

社会　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

英語　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

音楽　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

体育　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い

クラブ　：１．好き　２.ふつう　３．嫌い　４．やってない

■日常生活のことで質問します

6）学校では、日本人のお友だちがふえましたか？

１.とてもふえた　　２.少しふえた　　３.あまりかわらない

7）学校がお休みの日や放課後、日本人のお友だちとあそびますか?

１.よくあそぶ　　２.あまりあそばない　　３.あそんだことはない

8）今までに、日本人のお友だちの家へ行ったことがありますか？

１.よく行く　　２.あまり行かない　　３．行ったことはない

9）学校がお休みの日や放課後、ブラジル人のお友だちとあそびますか?

１.よくあそぶ　　２.あまりあそばない　　３.あそんだことはない

10）今までに、ブラジル人のお友だちの家へ行ったことがありますか?

１.よく行く　　２.あまり行かない　　３．行ったことはない

■家庭のことで質問します

11）今だれといっしょに住んでいますか？ またその人と何語で話していますか？

①－1 お父さんと、

1.いっしょに住んでいる　　2.いっしょに住んでいない

－2 お父さんと話すときは、

１.ほとんどポルトガル語　　２.ポルトガル語と日本語の両方

３.ほとんど日本語　　４.そのた（　　）

②－1 お母さんと、

1．いっしょに住んでいる　　2．いっしょに住んでいない

- 2 お母さんと話すときは、

１.ほとんどポルトガル語　２.ポルトガル語と日本語の両方

３.ほとんど日本語　４.そのた（　　）

③ - 1 兄弟姉妹は、

１.いない　２.いる（兄：　人、姉：　人、弟：　人、妹：　人）

- 2 兄弟姉妹と話すときは、

１.ほとんどポルトガル語　２.ポルトガル語と日本語の両方

３.ほとんど日本語　４.そのた（　　）

④ - 1 その他に、いっしょに住んでいる人がいますか？

１.いない　２.いる（おじいちゃん・おばあちゃん・いとこ・そのた:　　）

- 2 その人と話すときは、

１.ほとんどポルトガル語　２.ポルトガル語と日本語の両方

３.ほとんど日本語　４.そのた（　　）

12) 日本で今までにブラジル人学校でべんきょうしたことがありますか？

１．ある　２．ない

13) 塾やコミュニティセンターなどで、今まで日本でポルトガル語をべんきょうしたことがありますか？

１.べんきょうしたことがない　２.べんきょうしたことがある

3.今もべんきょうしている

■あなたのことで質問します

14）あなたの年齢と性別をおしえてください。

年齢：　　才　性別：男・女　学年：小・中　　年生

15）あなたが生(う)まれた国(くに)はどこですか？

1.日本(にほん)　　2.ブラジル　　3.ペルー　　4.そのた（　　）

16）あなたにとって、日本語(にほんご)とポルトガル語(ご)のどちらが話(はな)しやすいですか？

１．日本語(にほんご)　　２.ポルトガル語(ご)　　３.同(おな)じくらい

◎日本以外(にほんいがい)で生(う)まれた人(ひと)にききます

17）①日本(にほん)に来(き)たのは何才(なんさい)のときですか？　　才

②日本(にほん)にくるまえ、ブラジルで学校(がっこう)に行(い)っていましたか？

１.行(い)っていた　　２．行(い)ったことがない

ありがとうございました

資料 1-2　外国人児童生徒への質問票（ポルトガル語版）

Questionário Educacional

Colaboração no questionário

Marca com circulo o ítem correspondente

◆ Sobre a escola

1) Você gosta da escola japonesa?

1Gosto muito　2.Gosto um pouco　3.Mais ou menos　4Não gosto muito　5.Não gosto

2) Você gosta de estudar lingua japonesa?

1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

3) Você entende o japonês que os professores falam?

1.Entendo　2.Mais ou menos　3.No entendo

4) Você entende o japonês que os seus amigos falam?

1.Entendo　2.Mais ou menos　3.Não entendo

5) Você gosta dos estudos na escola?

Reponde sobre cada estudo.

Japonês(Kokugo) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

Matemática(Suugaku) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

Vida social(Seikatu) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

Ciência(Rika) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

Geografia/História(Shakai) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

Música(Ongaku) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

Educação Fisica(Taiiku) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto

Atividade de clube(Bukatu) : 1.Gosto　2.Mais ou menos　3.Não gosto　4.Não faço

◆ Sobre a vida cotidiana

6) Os seu círculo de amigos japonês aumentou na escola ?

1.Aumentou muito 2.Aumentou un pouco 3.Não mudou muito

7) Você brinca com os seus amigos japonês no feriado ou depois da aula,?

1.Brinca muito 2. Não brinca muito 3.Nunca brincou

8) Você já foi à casa do(a) amigo(a) japonês(a)?

1.Vou muito 2.Não vou muito 3.Nunca fui

9) Você brinca com os seus amigos brasileiros no feriado ou depois da aula,?

1.Brinca muito 2. Não brinca muito 3.Nunca brincou

10) Você já foi à casa do(a) amigo(a) brasileiro(a)?

1.Vou muito 2.Não vou muito 3.Nunca fui

◆ Sobre sua fammilia

11)- Mora junto com o seu pai?

1.Sim 2.Não

- Em que língua você conversar com o pai?

1.Português 2.Japoês 3.Português e Japonês 4.Outra( )

- Mora junto com a sua mãe?

1.Sim 2.Não

- Em que língua você conversar com a mãe?

1.Português 2.Japoês 3. Português e Japonês 4.Outra( )

- Você tem irmãos?

1.Não 2.Sim (irmão mais velho: pessoa, irmã mais velha: pessoa

irmão mais novo: pessoa, irmã mais nova: pessoa)

- Quando você fala com seus irmães, qual lingua você fala?

1.Português 2.Japoês 3. Português e Japonês 4.Outra( )

- Há alguem mora junto com vocês?

1.Não 2.Sim (Avó, Avô, Primo(a), Outro)

- Em que língua você conversa com essa pessoa?

1.Português 2.Japoês 3.Português e Japonês 4.Outra( )

12) Você já estudou na escola brasileira no Japão?

1.Sim 2.Não

13) Você já estudou português no Japão , em algums cursinho ou centro comunitário?

1.Sim 2.Não 3.Estou Continuando

14) Qual é a língua mais facil de falar, japonês ou português?

1.Japonês 2.Português 3.Igual

◆ Sobre você

15) Escreve sua idade, sexo, e série.

Idade: anos, Sexo: homem / mulher, Série: série

16) Em que páis você nasceu?

1.Japão 2.Brasil 3.Perú 4.Outro

◎ Para quem não nasceu no Japão

17)- Com quantos anos , quando você veio ao japão?

Anos

- Antes de vir ao Japão, você estudava no Brasil?

1.Sim 2. Não

Agradeçemos a sua colaboração. Muito obrigado!!

資料２　インタビューガイド（外国人保護者へのフォーカスグループインタビュー）

太田市内の公立小中学校に通うブラジル人児童生徒を子どもに持つ保護者への
フォーカスグループインタビュー

＜インタビューガイド＞

1）自己紹介
滞日歴、子どもの数、在籍学年、就学歴について
2）子どもの就学理由
・現在子どもが就学する学校を選択した理由は何ですか。
〔子どもが複数の場合、個々の就学状況について聞く〕
（ブラジル人学校に通わせなかった理由についても聞く）

3）家庭での子どもの様子
・子どもとのコミュニケーションはうまく取れていますか？
（何語で話すことが多いですか？日本語およびポルトガル語での会話の理解度は？）
・学校に関して、子どもはどんなお話をしますか？

4）公教育に関する意識
・学校の対応に満足していますか。
（満足していない場合はその理由を聞く）
・お子さんの学力について、心配していますか？
・お子さんは学校を楽しんでいますか？
・学校の行事や PTA 活動に参加していますか？
（保護者が参加する機会を楽しんでいるか、負担になっているかを聞く）
5）子どもの教育に対する今後の希望
・今後、学校の先生（教育指導助手や特配教員を含む）にどんなことを望みますか？
・今後、学校でどんな授業や行事があればいいと思いますか？
・「ポルトガル語を交えた授業についてどう思いますか？」
・お子さんの将来（中学校卒業後）について、どのように考えていますか？

資料３　インタビューガイド（教員への半構造化インタビュー）

外国人児童生徒の受け入れ校の実態調査
外国人児童生徒の教育に関係する教員へのインタビュー

＜質問項目＞
１）外国人児童生徒の指導体制と対応状況
指導体制、就学希望者への受け入れ対応（編入学、新入学）
在籍普通学級での状況等

２）指導上の課題と改善案
・日本語担当教諭あるいは指導助手の方の、実務の対応の仕方、外国人児童生徒への教育に対する意識、待遇に対する満足の度合など
・受け入れ校における、教員配置システムの改善案（例えば、一ヵ所拠点校による通級制度、もしくはレベル別による通級制度など）について率直な意見）

３）母語がわかる通訳補助員（日本語指導助手）配置による効果
・指導助手の学校で担う役割と効果

４）外国人児童生徒の学校生活、学習能力及び進路進学の実態
・外国人児童生徒の基礎学力、学習理解の状況
個々の学力や学習理解の状況、低学年と高学年に在籍する外国人児童生徒の違い等
・進路進学状況

５）外国人児童生徒の保護者と学校現場の関係
・保護者の学校への理解と参加状況
保護者への連絡・通信手段、保護者の PTA 活動の参加や個人面談参加の有無等